

『幸せの味』

株式会社赤坂柿山 京王百貨店聖跡桜ヶ丘店

矢ヶ崎 夏織

私の店舗に常連のお客様がいる。17歳の女の子だ。初めて来店された時、彼女は買いたい目的はなく、なんとなく店内を見回っている様子だった。ちらっと商品を見ていただけだったので、声をかける。興味をもっていただいて200円を一袋購入していただいた。

「ご自宅用ですか」

「はい。今日の頑張ったご褒美に何か買いたくなって。一つで申し訳ないんですけど」

「そんなことございませんよ。今日は何を頑張ったんですか」

そう聞くと彼女は嬉しそうに答えてくれた。少し前の小テストが今日帰ってきて満点をとれたということだった。満点なんてすごい！これは絶対ご褒美を用意すべき、と盛り上がった。他のお客様にもお配りしているものだが、パンフレットと試食のセットを渡し、「せっかくなので少しですがこちらもご褒美で召し上がってください」と言うと嬉しそうに笑顔になってくれた。

数日後、またご来店されたので声を掛けると、先日のことが嬉しかったので次にご褒美を買うならまたここに来よう、と思っていたことを教えてくれた。

また選んでいただいたことが嬉しく、今日は何を頑張ったのかと会話に花を咲かせた。

その様なことが続き、彼女はすっかり常連となった。

ある日いつものように来店された時に「今日はお礼が言いたくて。」と言った。実は先日友達とけんかしてしまい、かなり落ち込んでいた。どうやって謝ろうと思っていたところに、前に買ったおかきが余っているのを見つけて、気分転換に食べたら心が不思議と穏やかになった。おかげで心の整理が出来て仲直りできたということだった。

「毎回ちょっとのご褒美として食べていたから、この味は幸せの味だってどこかで思っていたのかも。これからは頑張ったから買うんじゃなくて、頑張るために食べるにも買おうと思います。あと、毎回お姉さんが褒めてくれるからついお店に来ちゃうんですけど…」恥ずかしそうに語る彼女を見て、私はたまらない気持ちになった。

毎回今日あったことを報告してくれる彼女に私も元気をもらっていたし、私がすすめたおかきの味と共に話した会話が“幸せ”と思える彼女の生活の一部になっていたことを嬉しく感じた。

「また来ます」と言って今日も一袋買って帰っていった。その後ろ姿を見て、これからは彼女の幸せの手伝いをしたいと強く思った。この一年で世間は騒がしくなり、イベントは次々に中止。外にもあまり出ないという日常となった。

こんな時に誰かの気持ちを上げる手伝いをすることが、今の販売員である私にできる事なのではないかと思う。常連になってくれた彼女のように、食べることで幸せになっていた

だけるような菓子を提供していきたい。